かるちゃ〜ナビ

ザ・見遊(みゅ〜)じあむ　43

通天閣のビリケンさん（大阪市浪速区）

浪速のシンボル・通天閣の展望台にある台座に、木製の愛嬌ある人形がちょこんと座っています。幸福の神様「ビリケン」で、足をなでると合格祈願、縁結びなどあらゆる願いをかなえてくれると言われています。この像は1908年、アメリカの女性アーチスト、E・i・ホースマンが夢で見たユニークな神様をモデルにしたもので、ビリケンの名前は当時のアメリカ大統領、ウイリアム・タフトの愛称が由来とされています。大阪では、1912年にオープンした「新世界」の遊園地・ルナパークに登場して一躍大人気に。「ビリケンさん」の愛称で親しまれ、七福神に加えて「八福神」とも称されました。

「アメリカ生まれの「幸運の神様」は満100歳

しかし第二次世界大戦中、施設が閉鎖される時にビリケン像は行方不明になります。戦後、現在の2代目通天閣が建てられ、1980年に、復元した現在の像が展望台に安置されました。昨年で満100歳を迎えたビリケンさんは、今日も通天閣に訪れる多くの人たちの願いを聞いています。

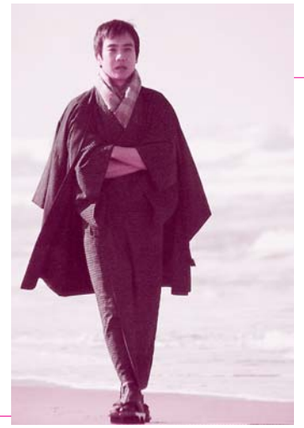
通天閣の周りにもビリケンさんが…

ミュージアムメモ

▶所在地／大阪市浪速区恵美須東1-18-6▶交通／JR環状線「新今宮」駅下車徒歩10分、地下鉄堺筋線「恵美須町」下車徒歩５分、地下鉄御堂筋線「動物園前」下車徒歩10分▶開館時間／９時から21時（入館は20時30分まで）▶年中無休▶展望料金／大人600円、大学生500円、中高生400円、小人300円▶お問い合わせ／06-6641-9555

このシネマがえいが

「鶴彬(つるあきら)ーこころの軌跡」



戦争を告発した29年の生涯

現代によみがえって大ブレイクした小林多喜二と『蟹工船』に続いて、この春の注目は、今年生誕百年を迎えた、反戦川柳作家・鶴彬です。鶴彬は本名喜多一二（きたかつじ）、1909年に生まれ、15歳から詩や川柳を作り始めました。わずか29歳で獄死。十数年の間に、詩14編、川柳1044句、評論85編を残しました。大阪では、17歳のときに此花区の町工場で働き、22歳のとき大阪城内にあった衛戍(えいじゅ)監獄に囚われました。日本の侵略戦争を痛烈に批判した「手と足と　もいだ丸太に　してかえし」、弾圧に屈しない思いをついた「枯れ芝よ　団結をして　春を待つ」、の句はよく知られています。

鶴彬の生涯を描いた、神山征二郎監督の映画『鶴彬―こころの軌跡』がこの春完成しました。3月29日に鶴彬の出身地の石川県・かほく町で行われた完成上映会には1000人の町民が詰めかけました。制作費がわずか2000万円の低予算という制約からドキュメンタリー映画という手法で撮られていますが、テンポよく展開していく場面はわかりやすく構成されています。随所に鶴彬の作品が織り込まれており、戦争を憎み、平和を希求した思いがよく伝わってきます。

完成披露映画会で舞台あいさつに立った神山征二郎監督は「戦前のあの暗い時代に、鶴彬が川柳を通して叫び続けた思いを伝えたい。もうあんな時代はごめんだ、という気持ちでこの映画を作った」と語りました。

摂津・河内・和泉　おおさか三国誌　43

蓮如と石山本願寺　周辺に栄えた寺内町が「大坂」の発祥地に

（大阪市中央区）

戦国時代に天下統一をはかろうとした織田信長が、武力で落とせなかったのが石山本願寺です。現在の大阪城の位置にあったとされるこの寺は、室町時代の中期、本願寺の「中興の祖」と言われる蓮如(れんにょ)が隠居地として選んだ場所で、戦国時代には本願寺宗徒の本拠地として栄えました。周辺には商人や大工などの庶民が住み、寺内町(じないまち)として発展しました。寺内町の一帯は上町台地の坂に面していたことから「小坂(おさか)」と呼ばれ、15世紀末頃に「大坂」という名になり、ここが大阪の地名の発祥地とされています。蓮如の時代から巨大な信徒集団に発展した本願寺宗徒は、戦国時代に入ると自らの信仰と信徒の生活を守るため、各国の大名に対して戦争や協調をしなければならなくなり、「一向一揆」と称される武装集団と化していきました。石山本願寺は、周辺に広大な石垣が築かれて強固な要塞となりました。本願寺宗徒は織田信長と越前（福井県）や紀伊長島（三重県）などで壮烈な戦闘を行い、老若男女に至るまで多数の宗徒が犠牲になりました。約10年にわたる戦闘の末、1580年に門主・顕如(けんにょ)が、織田信長と和解して場所を明け渡し、紀州（和歌山県）の雑賀に移住することで石山本願寺の歴史は幕を閉じます。念願の「天下統一の要地」を手に入れた織田信長はその後「本能寺の変」で命を落としますが、後を継いだ豊臣秀吉が、この地に大坂城を築きました。

石山本願寺の基礎を築いた蓮如

蓮如直筆の文字を記した石碑（大阪城公園）

大阪の戦跡を歩く　第42歩

青年パイロットの鎮魂碑

（交野市）

中村純一さんの鎮魂碑

落下地点近くに軍用鉄道跡地が。「陸軍用地」の石柱が残っています

1945年（昭和20年）７月９日、大阪を襲ったアメリカ戦闘機を、伊丹空港から日本機が迎撃しました。陸軍少尉だった中村純一さんは、空中戦で米軍機に撃墜され、パラシュートで脱出を試みました。しかし、降下中に米軍機の翼によってそのヒモを切られ、交野市の星田駅東付近の地面に激突。23歳の若さで亡くなりました。

1976年（昭和51年）８月発行の「遺族通信」（日本遺族会の機関紙）をきっかけに、中村さんの出身地、鹿児島の遺族と連絡がとれ、落下した場所に鎮魂碑が建てられました。

いまも心に響く名詩・名歌・名語録

教えるとは希望を語ること
学ぶとは誠実を胸に刻むこと
ルイ・アラゴン

フランスの詩人、ルイ・アラゴン（1897～1982）の詩。1943年、ナチスドイツの侵略で、大学の教授、学生が銃殺され、教育が危機に瀕した時に書いた歌の中にこの言葉があります。アラゴンは第２次世界大戦中、ドイツ占領下のフランスで反戦平和をかかげ、レジスタンス運動にも参加しました。戦争の悲劇の中で書いたこの歌の一節は、多くの人に語り継がれ、現在でも、各地の入学式や教育者の集会などのあいさつに好んで引用されています。

ひさかたの光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ
紀(き)　友則(ともので)

古今和歌集や百人一首でも有名な紀友則の歌。国語の教科書にも登場します。「こんなにのどかな春の日なのに、なぜ桜の花はあわただしく散っていくのだろう」という意味。春の美しさと、桜の散る哀愁を感じさせます。この紙面が読者に届く頃は、大阪では桜の花は、もう散っているのでしょうか。紀友則は紀貫之の従弟で、古今和歌集の撰者になりましたが、歌集の完成を見ずして亡くなりました。